

医師のプロフェッショナルリズム

並木 温

東邦大学医学部教育開発室教授

多くの医療用語同様、この「プロフェッショナルリズム」という用語も外来語です。文化的・歴史的背景の異なる外国からの輸入語の和訳を考える過程は、その単語の本質を理解するのに非常に有用です。「プロフェッショナルリズム」の和訳として「医道」がふさわしいとの意見があり、私も感覚的には賛同しておりますが、若い世代にとっては「医道」と言われてもイメージがわからないようです。また「プロフェッショナルリズム」はわが国における「医道」も包含しますが、より大きな意味を持っているように感じるようになってきました。「プロフェッショナルリズム」も「医道」も医学生となってはじめて耳にして教えられる言語という観点からは同等であり、それならば全世界でその意味が活発に議論されている「プロフェッショナルリズム」を日本でも共通言語として使用して、その議論に加わっていく方が合理的との意見もあります。

「プロフェッショナルリズム」の定義に関して、いままで長年にわたり全世界的に議論されてきました。しかし「プロフェッショナルリズム」は国や組織文化の影響を強く受け、時代と共に動的に変化するものであり、最近では“定義を議論することよりも、どのように教育すべきかがより重要である”と流れが変わってきたように感じます。しかし、しばしば行われるようなアンプロフェッショナルな事例に焦点を当てた教育は、守るべき最低限レベルの規範の呈示に止まるものであり、「プロフェッショナルリズム」はすべての医師が生涯かけて向上を目指すべき目標であることがマスクされてしまうような印象をもっています。現在の「プロフェッショナルリズム」教育において、①「プロフェッショナルリズム」に関する知識を公式カリキュラムの中で明示的に伝えること、②実践の中で経験を振り返る学習機会を与えること、③学年が上がるにつれてその学習レベルに応じた教育プログラムを繰り返し実施すること、が重要とされ

ています。

医学的な知識や診療技術は求められて当然ですが、生涯を通じて医療に対する姿勢に影響し続ける「プロフェッショナルリズム」は、その修得や評価が困難であり、わが国では“先輩（ロールモデル）の背中を見て学ぶもの”と考えられてきました。本学5年生のカリキュラムとして行っている地域医療実習においては、診療所（クリニック）を中心とした学外の医療施設で実習を行っておりますが、実習最終日の学生の振り返りにおいて患者-医師関係に感銘を受けたという意見が数多く出ます。医師のコミュニケーション能力の高さなどを良好な患者-医師関係の理由として挙げる学生が多いのですが、実習先の医師の「プロフェッショナルリズム」の視点からの議論を促しています。もちろんロールモデルの果たす役割は大きいのですが、従来「非明示的に」「意識せずに」行われてきた「プロフェッショナルリズム」教育の今後の方向性として、「公式カリキュラムの中で」「明示的に」教育する必要がある、そのためには教員側が「プロフェッショナルリズム」の意味を「明確に理解し意識的に」教育することを、今後積極的に進めるべきと考えています。

医療とは信頼関係を基盤として成り立つものであり、医療人（医師）が患者さんから信頼されることがその基本となることは言うまでもありません。一人の医師として、という意味のみならず、広く医師集団としての意味も含まれます。「プロフェッショナルリズム」とは、一言で言えばこの患者さんや社会からの信頼に応えようとするヒューマニズムや倫理など全てを包含する概念です。そして「プロフェッショナルリズム」の向上とともに患者さんや社会からますます信頼され、結果として医師のモチベーションが高まりさらなる成長につながる事となるのです。

DOI: 10.14994/tohoigaku.2016.r024